

# 矢源田窯跡

波積ダム建設に伴う集団移転地造成工事及び  
県道大田・井田・江津線付替え工事に伴う文化財調査報告書

2003年3月

島根県浜田河川総合開発事務所  
江津市教育委員会

### 矢源田窯跡正誤表

位置	誤	正
本文21ページ 15行目	2は波積町にある福城寺の長門に葺かれていた瓦で、文化年間(1804~1817年)の赤瓦である。	2は波積町本郷にある福城寺の山門に葺かれていた瓦で、文政年間(1818~1829年)の赤瓦である。

## 序

このたび、波積ダム建設に伴う集団移転造成工事及び、県道大田・井田・江津線付替え工事に伴い、瓦窯跡の調査報告書を刊行する運びとなりました。

石見焼発祥地と考えられている江津では、古くから都野津層により良質の粘土がとれた為、約200～300基の窯があったと言われております。最盛期には至る所で登り窯を焚く煙がみられていましたが、現在ではオートメーションで瓦を製造しており、登り窯で瓦を焼く所はなくなりました。

石州瓦は、来待釉の赤い釉葉が印象深く、江津の町では赤い光沢を放つ美しい軒並みがみられます。硬く焼き締められた石州瓦は、塩害や凍害に強い特色から、北陸などの寒冷地で使われ、やがて中国地方や九州地方への販路を広げ、江津市を代表する一大産業にまで発展しております。

今回の報告が江津市の窯業史に対する関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり、ご協力を頂きました地元の皆様や浜田河川総合開発事務所をはじめ、関係者の皆様方に厚くお礼を申し上げます。

平成15年3月

江津市教育委員会

教育長 **野上 公司**

## 例 言

1. 本書は島根県浜田河川総合開発事務所が実施した、波積ダム建設に伴う集団移転地造成工事及び、県道大田・井田・江津線付替え工事に伴い平成14年度に江津市教育委員会が実施した石州瓦窯跡の文化財調査報告書である。
2. 島根県浜田河川総合開発事務所の委託により江津市が実施した。
3. 調査体制は次のとおりである。

事務局 江津市教育委員会

平成14年度	野上 公司	教育長
	岩田 春正	生涯学習課長
	藤田 美恵子	同 課長補佐
	林 正司	同 係長
調査担当	梅木 茂雄	同 主事
事務補助	福本 和世子	同 囑託員
調査補助	澤津 孝	同 臨時職員
調査補助	恒松 明宏	同 臨時職員（平成14年12月まで）
調査補助	佐々木 渉	同 臨時職員（平成15年1月～4月）
調査協力者	石山広重、上本忠行、大野初恵、熊野操、郷原治、坂村昇平、高橋則明 竹内正忠、樋井信子、永見義隆、野沢淳、松島眞直、松原標侃、 山崎加津栄、山下幸子、無川美和子、山田ゆう子、藤本淳子、上野由美恵	

4. 現地調査、及び資料整理については、色々な方から有益ご助言をいただいた。島根県教育委員会文化財課、浜田市教育委員会、築窯師 嶋田俊文氏、三國靖夫氏、益野敏雄氏、嘉戸秀樹氏、アメックス協販、今崎窯業、ヨーケン  
報告書の作成は、梅木の指導の元、主に澤津が行った。
5. 報告書の作成は以下の者が携わった。（五十音順）  
上野由美恵、梅木茂雄、上手文子、鹿森三鈴、佐々木渉、澤津孝、  
恒松明宏、藤本淳子、無川美和子、山田ゆう子
6. 報告書記載の遺物・図面・写真等は江津市教育委員会で保管している。

## 参 考 文 献

島根県教育委員会	2001年	「飯田A遺跡・長東坊師窯跡」石見焼関連遺跡調査報告1」
島根県教育委員会	2001年	「上府八反原窯跡(佐々木窯跡)」石見焼関連遺跡調査報告2」
島根県教育委員会	2002年	「大田屋窯跡」石見焼関連遺跡調査報告3」
島根県教育委員会	1992年	「石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書」
島根県教育委員会	2002年	「島根県遺跡地図Ⅱ(石見編)」
益田市教育委員会	1996年	「益田拠点工業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
益田市教育委員会	1996年	「益田拠点工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
江津市教育委員会	1991年	「田室窯跡発掘調査報告書」
江津市教育委員会	1992年	「平成3年度埋蔵文化財調査報告書」
江津市編纂委員会	1982年	「江津市誌 上巻」第1節 工業業 第三章 第二次・第三次産業
江津市編纂委員会	1982年	「江津市誌 下巻」第1節 商工業の展開と発展 第7章 商工業の発展と農林漁業の推移
江津市文化財研究会	1986年	「石見潟 第十・十一号 江津市の窯と窯跡」
江津市文化財研究会	1988年	「石見潟 第十三号 石見焼(丸物と瓦)」
浜田市商工水産課	1953年	浜田の窯業
宮野秋彦	1986年	屋根叢書3「雨漏りの話」
小林章男	1990年	屋根叢書4「生きている鬼瓦」
宮野秋彦	1992年	屋根叢書5「古代日本の屋根」
石見陶器工業共同組合	1999年	「伝統的工芸品 石見焼 手引書」
石州瓦工業組合		「屋根の設計・施工 石州瓦標準施工マニュアル」
石見陶器工業協同組合	2000年	「伝統工芸品「石見焼」手引書」
石州瓦工業組合	2001年	「石州瓦工業組合40周年記念集」
三國靖夫	2002年	「石州瓦窯誌」
理工学社	1976年	「日本の瓦屋根」
新人物往来社	1975年	「日本の郷土産業 5 中国・四国」
鶴田真秀	1972年	「石州瓦史」
平田正典	1996年	「築窯四代記 抄」
平田正典	1996年	「石見粗陶器史考」石見地方史研究会
内藤正中	1997年	「図説 島根県の歴史」河出書房新社
森本幸治	1952年	「都野津町瓦工場図録」(江津市立図書館 所蔵)
井澤洋一		「福岡市博物館研究紀要5 筑前における中近世瓦の分類試案(上)」
八雲立つ風土記の丘 No.122・123	1993年	「石見地方における近世の窯業生産」

## 本文目次

序		
例言		
参考文献		
第1章	調査に至る経緯	1
第2章	位置と歴史的環境	1
第3章	調査結果	5
第1節	調査概要	5
第2節	窯周辺の状況	5
第3節	操業の様子	6
第4節	窯体の調査	9, 10
第5節	房内の構造	12
第6節	遺物	15, 18
第4章	まとめ	20, 21
都野津町瓦工場語録	石州瓦図譜	一～七

## 挿図目次

第1図	江東地区窯業跡遺跡	S=1/40,000・1/20,000	2
第2図	矢源田窯跡調査前地形測量図	S=1/500	4
第3図	登り窯平面・土層図	S=1/100・1/40	7, 8
第4図	大口・奇窯・フカセ・煙突の構造	S=1/40	11
第5図	房の構造	S=1/20	13, 14
第6図	矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物実測図1	S=1/6	16
第7図	矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物実測図2	S=1/6	17
第8図	「都野津町瓦工場語録」掲載イラスト		21
第9図	石州瓦基本構成(現代)		21
第10図	市内瓦当拓本一覧	S=1/4	22
第一図	都野津町瓦工場 石州瓦図譜 森本幸治		七

## 表目次

第1表	江東地区の窯、窯跡一覧表	3
第2表	登窯計測表	7
第3表	房内名称	13
第4表	矢源田窯跡 出土遺物観察表	19

## 写真図版目次

写真図版1	登窯全景(正面から)	右上: 9房内調査前(奥から)
写真図版2	上: 波積町本郷遠景 左下: 調査前登窯(正面から) 右下: 登窯完堀	左下: 9房甲端部組み方 右下: 11房甲内側
写真図版3	上: 5房目(正面から) 下: 登窯(正面から)	写真図版10
写真図版4	左上: 登窯通路(大口付近から) 右上: 登窯通路(7房付近から) 左下: 窯北西側礎石(北西から) 右下: 7房小口前作業場(南から)	上: 11房露抜き穴 左下: 煙突(西から) 右下: 煙突、フカセ(南から)
写真図版5	上: 9房～煙突(南から) 下: 8、9房裏側(北から)	写真図版11
写真図版6	上: 大口正面 下: 大口火格子穴	上: 煙突下、炭掻き出し穴 下: フカセ内部
写真図版7	上: 大口粘土検出状況 左下: 2房縮小前 右下: 2房縮小後	写真図版12
写真図版8	上: 6房焚庭奥壁 左下: 10房小口 右下: 9房内(奥から) 左下: 9房内(小口から)	上: 白地小屋跡(南西から) 中: 職人の宿舍跡(北東から) 下: 物原壁(北東から)
写真図版9		写真図版13
		上: 大口土層 中: 土層2 下: 土層4
		写真図版14
		上: 益野家屋根 中: 益野家瓦 下: 登窯作業風景
		写真図版15
		上: 矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物1
		写真図版16
		上: 矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物2
		写真図版17
		上: 矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物3
		写真図版18
		上: 矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物4

## 第1章 調査に至る経緯

1. 江津市教育委員会は、鳥根県浜田河川総合開発事務所より平成12年1月31日付けで都治川治水ダム建設事業（波積ダム）に係る埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについての照会を受けた。
2. 江津市教育委員会は、平成12年6月28日付け回答で、周知の遺跡である矢源田窯跡は調査の必要性があるため、協議を要す旨回答した。
3. 協議の結果、鳥根県浜田河川総合開発事務所と江津市教育委員会は平成14年5月27日付け都治川治水ダム建設事業（波積ダム）文化財調査委託契約を締結。江津市教育委員会が事務局となり、平成15年3月20日まで矢源田窯跡調査及び報告書作成を行なった。

## 第2章 位置と歴史的環境

江津市は中国山地を貫流し日本海に注ぐ江の川により、江東地区と江西地区に分かれている。江の川は昔から物資の輸送が盛んで、川沿いではタタラ場や木炭の産業が栄えていた。石州瓦の始まりは元和5年（1619年）浜田城築城の為に大阪より瓦師を招き、御用瓦として焼かせたのが始まりと言われている。この頃の瓦は平瓦と丸瓦の本瓦で、藩関係の建築物、神社佛閣、庄屋などの有力者の家屋等で使用されており、一般庶民には無縁のものであった。延宝2年（1674年）大津の瓦工が本瓦の丸瓦と平瓦を一体化させた棧瓦を考案した。浜田藩では寛政3年（1791年）、享和元年（1801年）、文政年間（1818～1829年）の3回にわたり瓦葺きを禁止制限する通達を出している。石州瓦が一般庶民に普及するのは江戸時代末期頃であった。釉瓦の緒言は小川家文書の寛政5年（1793年）に油瓦として記載されている。

明治・大正時代になると日本海沿岸に鉄道や国道9号線が開通し、輸送経路が拡大した事により物資の輸送が容易になった。その為、駅の周辺や国道沿いなどで産業が栄える様になった。江津市周辺では都野津層と呼ばれる良質の粘土がとれる為、窯業最盛期には100基以上の窯場があった。

第二次世界大戦に入ると窯場は休業せねばならず、また戦時中の乱伐とパルプ工場の進出による森林資源の不足で登窯の燃料である松が高価になり、燃料転換せざるを得なくなった。昭和28年登窯に替わって重油を燃料とするトンネル窯が県内で初めて石州瓦都野津協同組合で導入された。トンネル窯は大量生産、高品質、オートメーション化によって労力、経費ともに優れ、登窯に比べると8倍の量が生産されコストも3割安くなり、登窯で瓦を作る所は徐々になくなっていった。現在では登窯で瓦を焼く人はいなくなり、石見焼きは民芸陶器として残っている。



第1図 江東地区窯業跡遺跡 S = 1/40,000 · ㊤ 孤大地図 1/20,000

### 第1表 江東地区の窯、窯跡一覧表

名 称	所在地	創業	規模	廃業	概 要
1 迫田窯跡	波積町 本郷	S22年		S24年	
1 木田窯跡		S24年		S33年	井田でも1基借受け
矢源田窯跡		S33年	12房1基	S39年	
2 浅野窯跡	都治町 越前	S30年	6~7房1基	S37年頃	
3 佐々木共同窯跡	波積町 北	S28年	10房1基	S35年頃	佐々木亀之助氏、森田清直氏、山前茂氏共同出資で新設。
4 柴田窯跡	波積町 北	M上旬	8房1基	T上旬頃	
5 十尺窯跡	波積町 北	M中葉~ T末期頃	7房1基		
6 杉野窯※	波積村				文化10年 (山藤 忠文書より)
7 素治郎窯跡※	波積村				明治4年 (鶴田 眞秀文書より)
8 阪野窯跡	浅利町	M17年			丸物
9 西山窯跡※	浅利町	M16年			丸物
10 山城窯跡	浅利町 駅前			戦中	丸物
浅利窯業組合窯跡	浅利町 駅前				丸物
11 吉村窯跡	浅利町	S28年			浅利窯業組合窯戦後買取、瓦
12 木村窯跡	浅利町				瓦窯新設創業
13 島田窯跡	浅利町		ダマ窯2、3基		素焼き黒瓦を焼成販売
14 平岡屋窯跡	浅利町 駅前	T7年		S9年	丸物
森口窯跡		S9年			平岡屋窯買取、丸物
岡田窯跡		戦後		S30年	戦後丸物窯開設
15 (有)横路窯業所窯跡		S30年		S58年	瓦窯改修、S42年トンネル窯に移行
浅利窯業所		S58年	ガス窯7基		横路窯買取り
16 浅利窯業会社窯跡	浅利町 166-2	S3年	瓦窯2基	S3年	石州陶苑に譲る
石州陶苑(有)		T年間			浅利窯業会社瓦窯2基買入れ創業
17 田中窯跡	後地町 葦	T14年	5房1基	S30年頃	瓦
18 佐々木利太窯跡	後地町 松井	T14年	5房1基	S30年頃	鉄砂瓦生産
19 松尾屋窯跡	後地町 葦3171	T12年		T12年	不詳
20 甲野屋窯業所		T12年			松尾屋窯買取受け、丸物生産。昭和29年瓦窯増築
21 石州鬼瓦工業(有)	後地町 3133-1	S62年	ガス乾燥機3基		
古川共同窯跡	後地町 葦	T初期	14房1基	S10年頃	古川春市、古川繁市、島田梅市の三人で創業
22 鶴田窯跡	後地町 葦	S10年			古川共同窯買取、丸物窯に改修戦後、民陶
23 古川窯跡	後地町 葦2451	T10年	13房1基	S45年頃	瓦と丸物。
24 近江窯跡	後地町 葦1318	T6年		S56年	近江窯買取り瓦窯に改造創業、瓦
川下窯跡		S初期	15房1基	S22年頃	
25 三福屋窯跡	後地町 葦	S22年			三福屋窯買取受け創業。
鎌田窯跡		S22年			昭和39年瓦窯に改造、初窯は鉄砂瓦を焼く
26 山下窯跡	後地町 葦2501	S29年			現在は民芸陶器
石見秀山焼窯元					丸物、戦後民陶
27 升野窯跡	後地町 葦	T6年			
28 山中窯跡※	後地町 葦	T年間	14房1基	S15年	丸物
大庭窯跡	松川町 太田	T年間			丸物
横田窯跡	浅利町 浅利345	S23年		S23年頃	大庭窯買取
花田窯跡		M初期			丸物
29 西川窯跡	松川町 太田				花田窯買取、丸物
有田窯跡				T初期	西川窯買取、丸物
野沢窯跡		T初期		T3年	有田窯買取、丸物
湊窯跡		T3年		S5年	野沢窯買取、丸物
佐々木窯跡		S5年		S7年	湊窯買取、丸物
井上窯跡		S7年			佐々木窯買取、丸物
本田窯跡				S25年	井上窯買取、丸物
大場窯跡		S25年		S34年	鉄砂瓦の後、未待瓦生産
佐々木復雄窯跡		S34年			大場窯借り受け創業
30 ここの屋窯跡	松川町 太田	T年間			井上姓、丸物
31 田中窯跡	松川町 藤川谷				丸物
32 中祖窯跡※	川平町 空城	M初期			
33 嘉戸窯跡(仮称)	嘉戸町 嘉戸	M40年			瓦工場創業
本川窯跡	渡津町 嘉戸				長徳寺前窯買取、丸物窯改、丸物
升野窯					本川窯買取、戦時中産、丸物
34 渡津村稲長衛窯跡※	渡津村	文化10年頃			
35 渡津村初五郎窯跡※	渡津村	文化10年頃			
36 松田窯跡	渡津町 下渡津	M25年		S28年頃	丸物、茶器、花器

※ 場所不明の窯跡



## 第3章 調査結果

### 第1節 調査概要

調査は登窯の甲（アーチ部）や煙突の精査から始め、房の中、小口前作業場、通路の順に行った。精査の後、この窯の改修に携わった築窯師、嶋田俊文氏に現地で指導を受けた。この窯を築いたのは父：嶋田一善氏である。大口から6房までは完全に土に埋もれ、房の中には不良製品や窯道具が散乱していた。窯のある土地は6房辺りを境に地権者が違う為、廃業後は大口から6房までが植林の為に壊されていた。

#### 経営者

戦後（昭和22年）、迫田増七氏ら7人で瓦窯1基を新設。迫田氏は昭和24年に木田勝氏に譲り、昭和33年に矢研田弥一郎氏に譲る。同氏により昭和39年まで操業され、その後廃業した。

### 第2節 窯周辺の状況

（以下4項目については、聞き取り調査に基づく報告である。）

#### 物原（写真図版12）

昔（戦前）は大口の前から今の大田・井田・江津線の道路辺りまで田圃があり、そこに不良品を投げ捨てたことがわかった。窯の西側には水路が通っており、この高さが昔の田圃面である。比高差は3～4mあり、今では不良品の瓦・火立て・アゼを使用して基段が作られている。東側の斜面でも不良品、窯道具を再利用して基段が作られている。

#### 平坦面1

登窯と白地小屋の間に位置する。昔、墓があったが登窯を作る時に別の場所へ移し、材料置き場になっていた。

#### 白地小屋跡（写真図版12）

窯の北東の平坦面が白地小屋跡である。小屋は平屋で瓦葺きである。操業当初は建物の配置が一字形であったが、増築してL字形になっていたことが分かった。現在では礎石、土漉し場、土練機の土台、粘土山、石白などが残っている。

#### 職人の宿舍跡（写真図版12）

窯の東側の平坦面が職人の宿舍跡である。職人は常時二人で、入れ替わりが激しかったようである。平坦面にはヌケ（石見焼きの丸物を窯積みする道具）、石白が残っている。

### 第3節 操業の様子

#### 粘土

窯場北側の山では良質の粘土が取れ、現在も山の至る所では採掘跡やそれに関係したと思われる道などが残る。聞き取りでは、この粘土は焼き歪みが激しく瓦には適さないので、ハタ（都野津）から持ってきた粘土と混ぜ合わせて使用していたという。

#### 窯積み

1房の火格子側の壁には瓦幅でモミツチ溶着痕があり、瓦を最高4～5段積んだと思われる。3段以上は直立段を使わずオイバセ（壁と瓦の間に挟むモミツチ）を使って瓦を積んだと考えられる。道具物（鬼瓦、須山、太鼓、杵巴、切巴など）は一番上の棧瓦が積みなくなったスペースを利用して積んでいた様である。（第5図）

軒棧瓦、駒型雪止瓦、輪型雪止瓦などは瓦同士の間<sup>のし</sup>に熨斗を挟んで焚く。

9房では焚庭に瓦が5枚溶着している（写真図版8）。これは最後に窯を焚いた時に崩れた物である。

#### 窯の改良

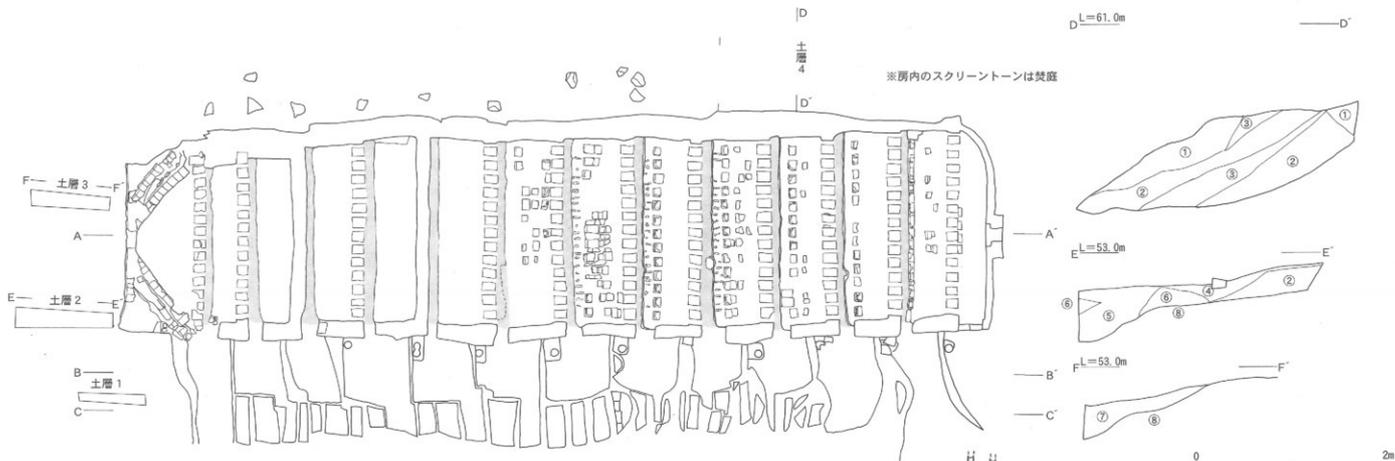
窯には必ず改良、修理が必要である。補修箇所には粘土をつけて補強している。寄窯～3房の外壁を外した後を観察すると火格子の焼けた跡があり、窯を縮小させた事が確認出来た。6房～11房の内側は甲とそれ以外の場所でアゼの色やガラス質の溶着が全く異なる。聞き取り調査の際、窯が流れた（崩れた）と聞いたので、甲が崩れて修理した事により、ガラス質の溶着の厚さが違う事が確認できた。聞き取りでは創業当初は現在の9房辺りに小さな煙突があった。火が上がらない（火力が弱い）為、窯を拡張し煙突をつけ直して今の大きさになったという。（写真図版7）大口の中心にトレンチを入れた結果、改良前的大口の床面が確認できた（第4図）。勾配は改良後よりは急であった。

#### 運搬

窯の小口前作業場の通路には白地小屋から大口まで滑車が通り、白地小屋で作った製品を滑車に乗せて各房まで運び窯積みを行った。窯から出した製品は滑車で大口の辺りまで運んで出荷した。木田氏が経営していた時に道を整備し、白地小屋への車での走行を可能にした。

#### 土層について（写真図版13）

大口前の土層2では約50cmの深さから、窯道具、不良瓦などが出土した。大口前から約3m離れた所で物原が始まる事が確認出来た。土層3では地山の上に炭の堆積が確認できた。これは窯を焼き終わった後、大口で燃え残った炭をかきだした跡と思われる。土層4では不良品の堆積の下に、窯を作る時、地山を削ったと思われる層が確認できた。これは窯体保護の為、人工的にもられた土である。窯の側壁が見えなくなるまで地山ブロックが堆積している。



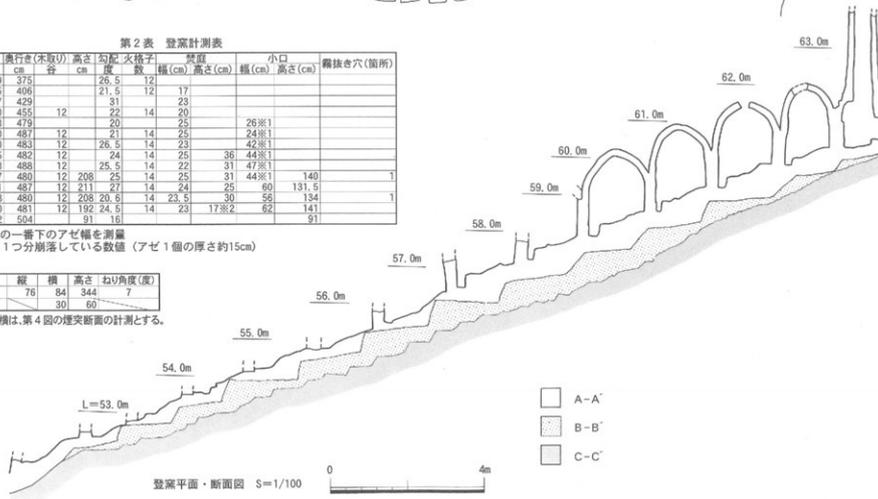
第2表 登窯計測表

大口径	幅		高さ	勾配	火格子	焚産	小口		竈抜き穴(箇所)
	cm	寸					幅(cm)	高さ(cm)	
149	375	容	28.5	12					
2房	66.5	406	21.5	12	17				
3房	117	429	31	23					
4房	120	455	12	22	14	20			
5房	113	479	12	20		26※1			
6房	120	487	12	21	14	25	24※1		
7房	140	483	12	26.5	14	23	42※1		
8房	155	482	12	24	14	25	36	44※1	
9房	133	458	12	25.5	14	22	31	47※1	
10房	137	480	12	208	25	14	25	31	44※1
11房	131	487	12	211	27	14	24	25	60
12房	138	480	12	208	20.8	14	23.5	30	56
13房	120	481	12	192	24.5	14	23	17※2	62
フカサ	72	504		91	16				91

※1 小口の一番下のアゼ幅を測量  
 ※2 アゼ1つ分崩落している数値 (アゼ1個の厚さ約15cm)

	縦	横	高さ	おり角度(度)
煙突	76	84	344	7
煙り出し	30	60		

※煙突の縦横は、第4図の煙突断面の計測とする。



登窯平面・断面図 S=1/100

第3図 登り窯平面・土層図

S=1/100・1/40

- 1 赤色焼土、不良品含む
- 2 地山風化層(ブロック含む)
- 3 地山風化層(粒小)
- 4 暗茶色粘質土層
- 5 褐色土層(不良品含む)
- 6 褐色焼土層
- 7 灰層
- 8 地山

土層図 S=1/40

## 第4節 窯体の調査

### 連房式登り窯

窯は全長22.8mで大口（始めに焚く所）、寄窯（1房）～12房、フカセ（素焼き焼成室）からなり、細尾根の傾斜を利用して等高線に直行して築かれている。全ての房は火格子穴でつながっており、大口から焚いた火が上の房に上がっていく仕組みである。1200～1300℃の高温で焚く事によって窯が膨張し圧力がかかる為、外壁はアゼを二重に使用して組んでいる。甲（アーチ部）には外圧をかける為泥（甲土）を盛り、頑丈な作りになっている。構造、規模は表2でまとめている。

### 築窯材

何種類かのアゼ・モミツチを使用している。シキアゼ（約32×23×9cm）は火格子の土台になるアゼである。アゼ（約15×23×30cm）は火格子、壁、その他色々な所に天日干しの状態で使用する為、大きさには多少の違いがある。アゼに使用する粘土の種類は、火に強いが粘りが弱い物、火に弱い粘りが強い物の2種類がある。作り方では、型で作る物（アゼの角が丸くなっている）、タタラで作る物（角がある）の2通りの作り方がある。改修する時にはガラス質が溶着していない部分が残るアゼは、アゼの溶着部分を使用しない様に再利用していた。モミツチは粘土の状態で使用して直立段の勾配を調節したり、アゼ同志の接着に用いた。アゼの接合部に刻み目を入れ、接着しやすくしている箇所も確認できた。

### 大口（写真図版6, 7）

窯を焚く時一番最初に焚き始める所で、焚き口は幅約30cmである。土台はアゼを長方形に3段積み上げ、その上にV字状にアゼを並べ、数段積み上げている。アゼの間には補強の為、粘土が詰めてある。V字のアゼは窯の左右で大きさが違う。窯正面から見て右側は大きいアゼを使用しており、左側は窯寸法の微調整の為、小さいアゼを使い、瓦や火立てで微調整している。V字のアゼが二重になっているのは側壁まで、甲は一重で築き、その上に泥（甲土）を盛る。床は火の登りを良くする為、傾斜をつけて粘土を貼っている。その為、床面では松割木のガラス質が付着している。火の廻りを良くする為、火格子穴は窯の中心ほど狭く外側は中心に向かって角度がついている。大口内で溶着した釘を確認したので、廃材も燃料にした可能性がある。（第4図 大口平面図のスクリーントーンは粘土を表す）

### 寄窯と房

構造の説明の前に、理解を助ける為火の特徴を説明する。ロウソクに火を灯した時、火元は低温で火力は弱い。火元から三分の二当りがもっとも火力が強くなり、先端へ行くほどまた低温になっていく。

寄窯と房の構造は、この考えに基づき創意工夫されている。寄窯は温度が上がらず良い製品が出来ない為、小さく作られ直立段も持たない。

2～12房は火の特徴を考えて、大口付近は弱い火力で温度を上げる為に小さく作り、

中ほどは強い火力を利用し、大きく作っている。煙突付近は火力が下がる為、中ほどより小さく出来ている。窯の勾配も、大口付近は火を溜める為緩勾配に作り、中ほどは早く次の房へ火を送る為急勾配となる。窯の後半部は火力が弱い為緩勾配となる。

また、丸物は窯積めする時に空間が多く空くので、緩勾配でも甲まで火が廻るが、瓦は窯積めする時に隙間がほとんど無く、緩勾配だと火は上方に廻らずまっすぐ火溝を抜ける為、急勾配にして火を甲まで引き上げる工夫をしている。

#### フカセ（写真図版11）

粘土製品を素焼きする所である。平面形は弓形で、焚庭、直立段はない。釉薬を掛けない物を焼く為、内壁にガラス質は溶着していない。フカセ内で多量の素焼きのハセを確認した。フカセの甲に煙突を付ける為、フカセ中心には23×32×9cmのアゼ（第4図フカセ立面図のスクリーントーン）を立てて築くが、この時にアゼが火格子穴を少し塞ぐ様に置いている。これは、火の廻りを良くする為である。立てたアゼの4段目には煙突の土台になるアゼをねかせて置いている

#### 煙突（写真図版10, 11）

フカセの中心にある。煙突をつける事によって大口からの火の引き（上がり）を強くする。煙突の構造は、まず四隅のアゼを交互に組んで、その間を火立てと瓦で幅を調整しながら組み上げている（第4図）。フカセの上に煙突を築いたのは、築窯の手間を省く為である。

ねり（煙突の傾き）の角度は普通1尺上がっての3分から4分内に入る角度で、それを水平器に当てて築く。

嶋田氏は、煙突の四隅の一辺が32cmになるまで煙突を組み上げていった。

#### 小口前作業場（写真図版4）

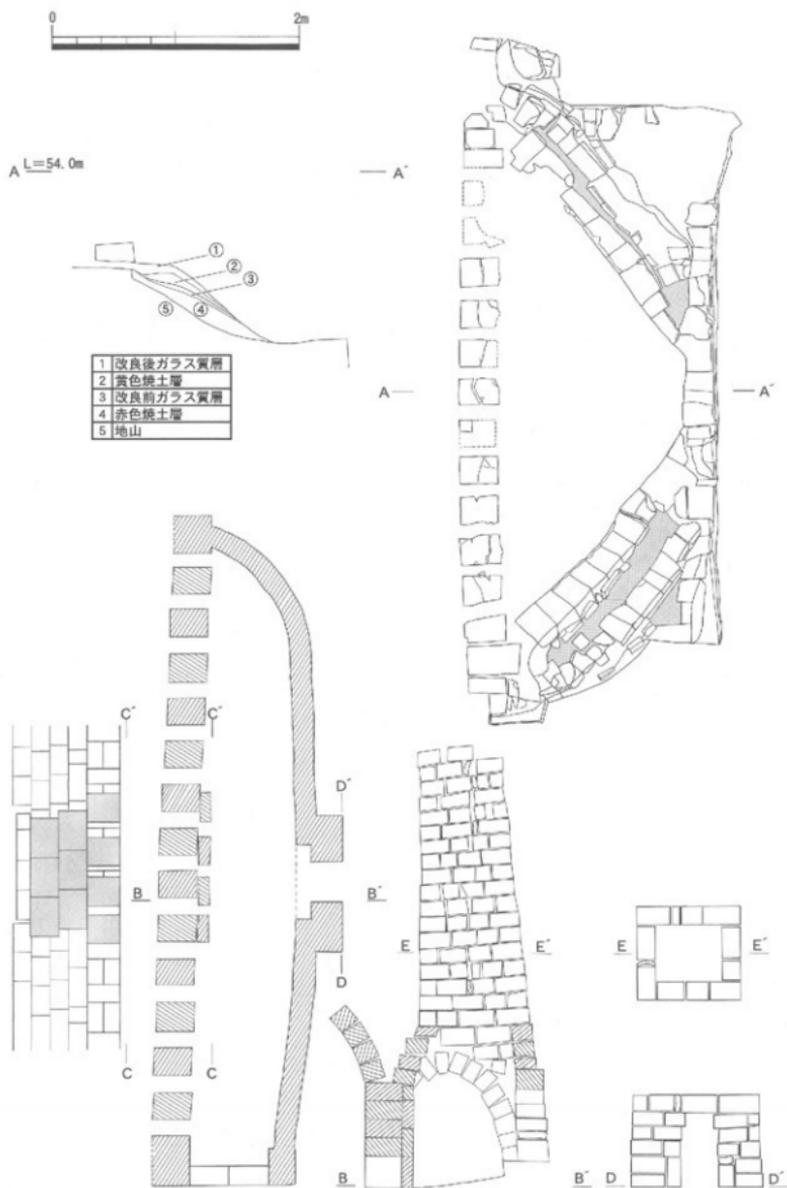
窯を焚く時、薪の投げ入れや瓦の荒分けをする所。小口前作業場は地山を削り出した上に粘土を貼って整地し、作業面として使用した。作業場の補強の為、アゼや火立てを用いて壁を組んでいる。

#### 通路（写真図版4）

登窯の右端には、作業場と同様に地山を階段状に削り出した通路がある。10房付近から上の通路はアゼや火立てを使わず、地山を削り出しただけで使用している。

#### 上屋根（写真図版4）

カmazヤとも言い、登窯全体を覆う屋根である。聞き取りによると窯の上には洋瓦を流葺きに葺いていたと思われる。洋瓦は白地小屋跡付近に多く積まれていたので廃業後、何かに転用する為に運ばれたと思われる。フカセや煙突に使用されているアゼは、雨が当たっても良い様に、耐火モルタル、石灰、ネバ土（粘質の高い土）を混ぜた物を塗っている。上屋を支える柱跡の基礎が各房小口前と房の反対側に、一対づつ置かれている。基礎には石、アゼ、火立てを使用しており、大口よりの礎石にはコンクリートで柱の根元を補強している箇所も見られる。登窯の北西側は補強の為に削り出された地山の土を80～90cmかぶせている。



第4図 大口・寄窯・フカセ・煙突の構造

S=1/40

## 第5節 房内の構造（第5図）（写真図版8・9・10）

### 直立段

瓦を階段状に積む為の段。22×30×15cmの粘性の少ないアゼを使用している。今回の調査では直立段はほとんど残っておらず、土台が確認できるのみだが、直立段は元々3、4段あったと思われる。直立段は焼けが良い為、廃業後何かに転用される事が多かった為に残らなかったと考えられる。

### 火溝

直立段の間にある火の通る溝で火の流れを良くする為に、溝全体に粘土を貼って傾斜をつけている。

### 火格子穴

火が各房に廻る様に房と房の間に開いている穴。穴の大きさはコブシの握り方で決められているが、今回の調査では粘土の収縮やガラス質の溶着などで確認できなかった。軸の溶け具合を見て、火の強い穴には瓦などを詰めて窯全体にバランス良く火を廻らせた。窯の火格子穴は使用している内に房の中心から外に向かって傾いてくる。これは房の熱が外に逃げようと膨張する為に起る現象である。

### 露抜き穴

窯を焚く時に瓦の水分を抜く為の穴で本焚きする時に塞ぐ。調査では31×14cm程の穴を9房・11房で1穴ずつ確認した。窯を焚く時は小口の上を少し開けて露抜きをしているので、露抜き穴は1つで間に合っていたと思われる。9・11房の甲の上で露抜き穴を塞ぐ為のアゼを確認した。

### 焚庭

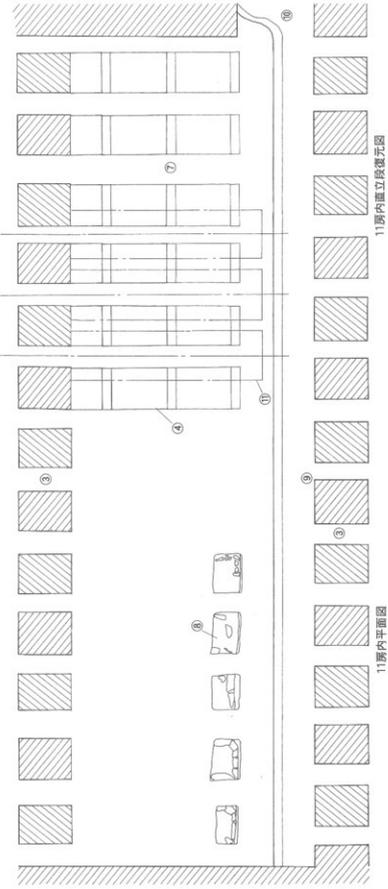
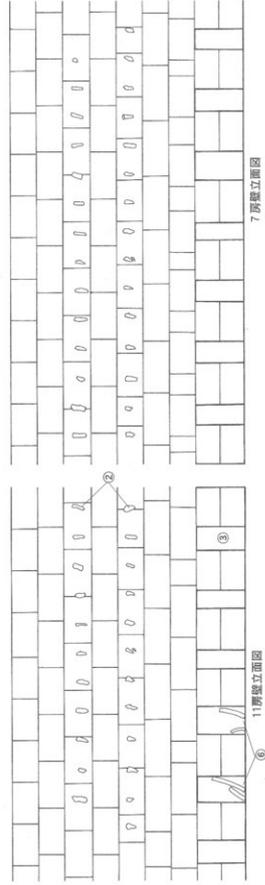
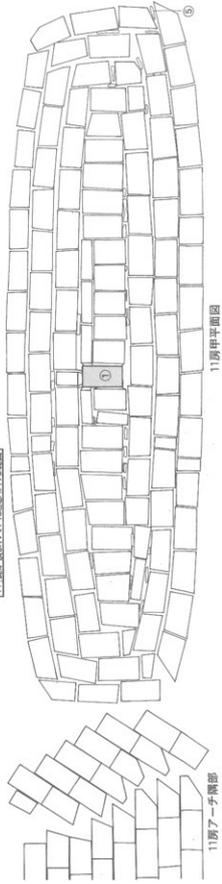
小口から薪を投げ込み焼成する所。6房で薪をぶつけた時に奥壁に開いた穴を確認した。

### 小口

焚庭のライン状にある。窯は後ろから前に向かって重力がかかるので、窯の強度を強くする為に小口は小口正面から見て右に傾く馬蹄形を呈している（築窯師 嶋田俊文氏の独特の技法）。小口のアーチ部分は、アゼの隅をナタで切り、台形にしたもので組んである。窯焚きの時、小口を塞ぐ泥の跡も確認出来た。

### 甲

窯のドーム状の部分。甲の上には約5cmの甲土があった。隅の処理は、生干しアゼをナタで切り、アゼ同士が噛み合う様に組んである。甲をアーチ状に組むと、甲の外側には隙間ができ窯の安定を欠く為、瓦片をクサビにして打ち込んでいる。10房の甲の内側にはハケメがあるが、窯を焚く時にふりもの（軸葉が溶け流れ出た物）などが流れて、瓦につかない様に火に強いアルミナをホウキで塗った跡である。



第5図 階の構造 S=1/20

## 第6節 遺物

瓦 釉薬の種類には来待釉、鉄砂釉の2種類が使われている。釘穴は瓦の種類によって異なる。棧瓦は2つ穴の物が多く、穴の大きさは0.5～1cmで裏は穿孔が不十分な物もあるが、葺師が瓦を葺く時に穿孔している。

軒棧瓦(第6図-1～3、写真図版15) 屋根の軒の部分に葺かれる瓦。20個体出土した瓦当は唐草紋の変化により2種類に分けられた。

袖瓦(第6図-8、写真図版17) 屋根の妻側に葺かれる瓦。左袖に葺く瓦は棧を切り袖板を付ける。右袖に葺く瓦は袖板をそのまま付ける。今回の調査では小袖瓦を確認した。

雪止瓦(写真図版15) 積雪時に雪が屋根から落ちるのを防ぐ瓦。2種類の雪止瓦を確認した。駒型雪止瓦は、頭の部分に駒型の板状の雪止が付いている(第6図-5)。輪型雪止瓦は、頭の部分に粘土を輪型に付けている(第6図-6)。2種類とも棧瓦に粘土の状態で貼り付けて作っている。接合面は切り目を入れて接合しやすくしている。

棧瓦(第6図-7、写真図版16) 瓦を葺く際に最も多く使用される瓦。棧瓦の大きさには規格があり、一坪あたり63枚の瓦を葺くことの出来る瓦の大きさを六三判、53枚葺かれる瓦を五三判という。他に五六判もある。現在は五三判が多く使われている。矢源田窯跡の棧瓦は五三判であった。

熨斗瓦(写真図版15、16) 棟に葺く瓦。大熨斗瓦、割り熨斗瓦の2種類の瓦があり、大熨斗瓦は割り熨斗瓦の下に葺いたり単独で葺くこともある(第7図-10)。割り熨斗瓦は葺く時に割って使用する為、表側中心の凸部に切り目がはいつている(第7図-9)。第7図-12・13は割れた物。

棟巴瓦(写真図版18) 屋根の棟の先端で、棧瓦の上にかぶせ、鬼瓦の土台として使う瓦。矢源田窯跡では切巴、杓巴の2種類の瓦を確認した。第7図-8の紋板では型の貼り合せ部分が確認できる。紋板師は独立しているので、型の特徴で窯元を特定する事は出来ない。

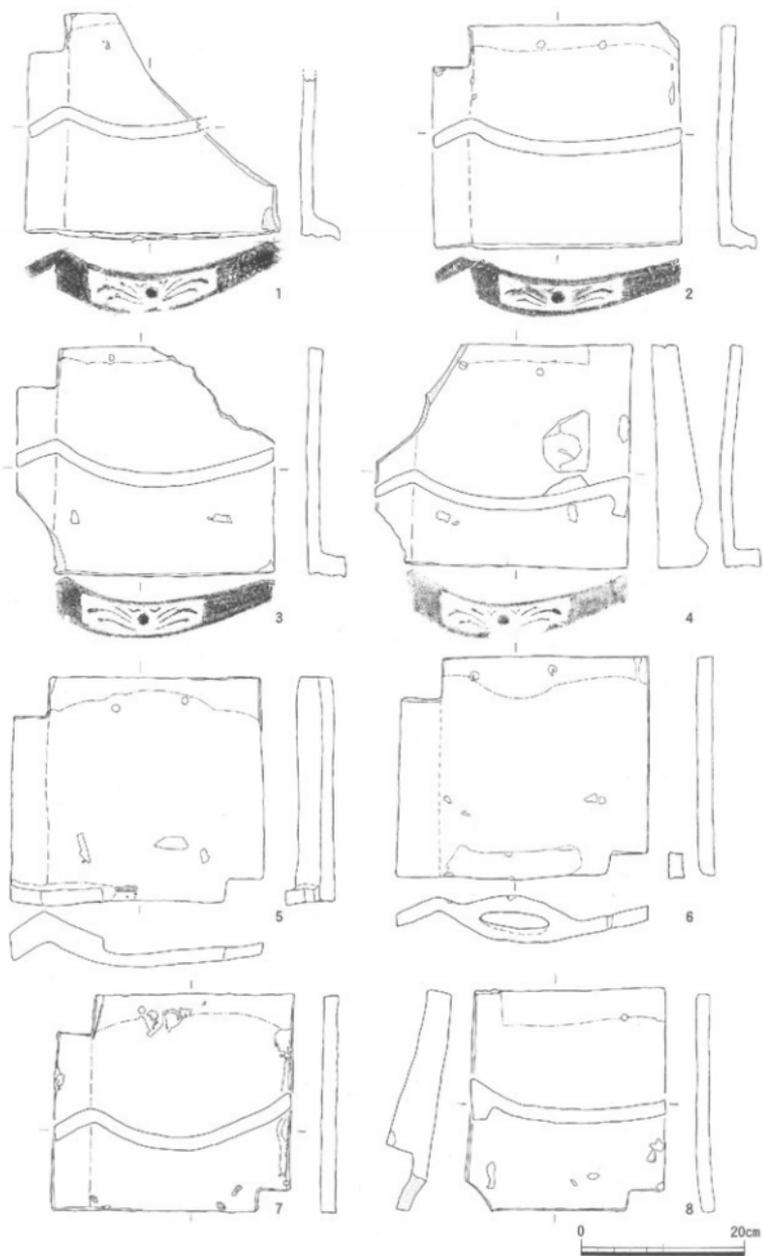
雁振瓦(第7図-11、写真図版18) 棟の最頂部に葺く瓦で、今回の調査では先端に粘土紐を張付けた、ひも付き雁振が確認された。瓦のほぼ中央部には釘穴が1つある。

洋瓦 写真図版17-35は「イ日」と印がある。製造元と規格番号である。「日」は日満洋瓦製作所で作られた物である。写真図版17-36は「A惣庄△」と印があり、「惣」は丸惣で作られた物である。県内では昭和14年に都野津町の日満洋瓦製作所で初めて洋瓦工場が設立された

### 道具物

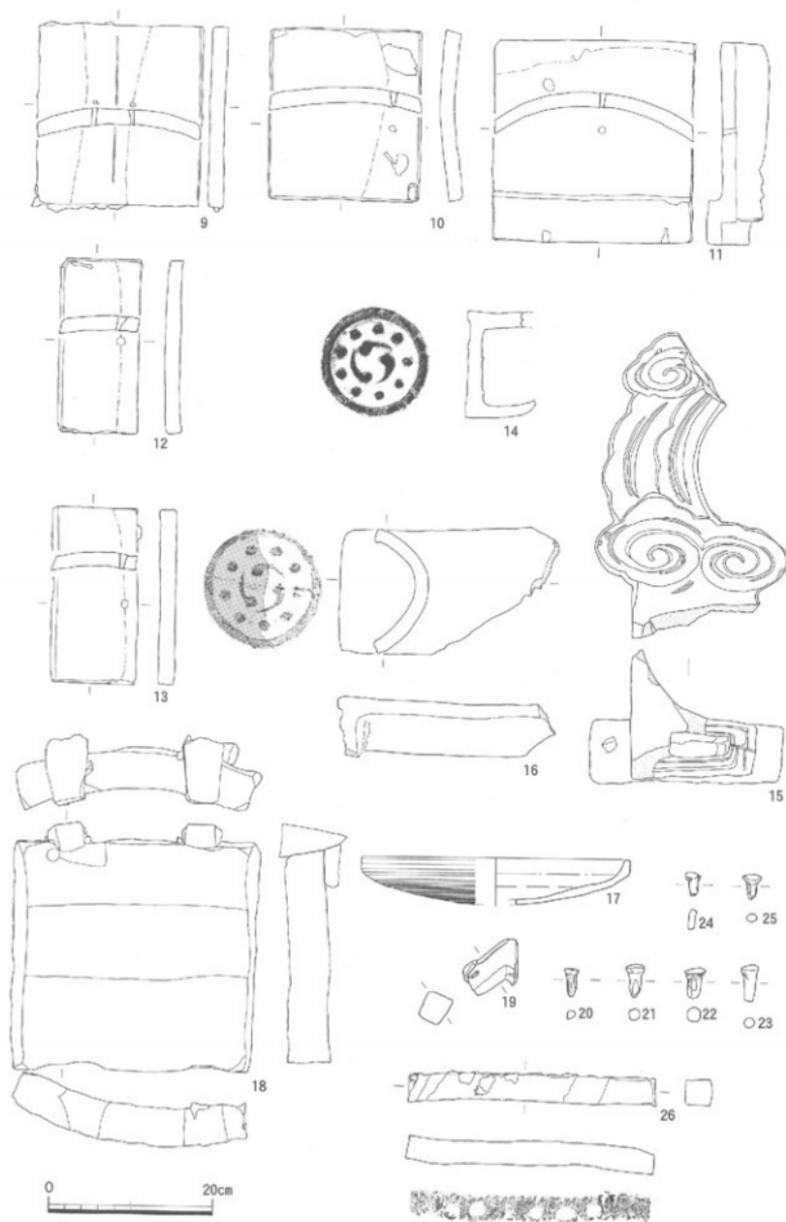
立浪(第7図-15、写真図版18) 棟に葺く装飾された瓦。熨斗の上に波の立ち上がった装飾を施している。貼り合わせの型作りで、中は空洞になっている。

太鼓(写真図版18) 棟に葺く装飾された瓦。紋板部分には3つ巴紋が一つ確認出来たが、元は3組あったと思われる。窯積めの時モミツチを敷いて太鼓を伏せて焼いた為、モミツチ痕が残る。



第6図 矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物実測図 1

S = 1/6



第7図 矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物実測図2

S= 1/6

## 陶器

**焙烙（第7図-17、写真図版18）** 物を炒る道具で素焼製。物原で確認した。外側にさび軸と思われる軸を掛けた後、カンナで渦巻き状に削り取っている。外側が焼けていないので未使用の物だと思われる。瓦職人は丸物も作れるが、この製品かどうかはあきらかでない。

## 窯道具類

**モミツチ（図版7-26、写真図版18）** タタラ（土の塊）を紐や鉄線で3×3×30cmの大きさに切り離し生干しする。瓦との溶着を防ぐ為仕上げにマサ砂をまぶす。窯積みする時は瓦の上下にレール状に敷いて使用する。モミツチの上面は瓦と火立ての溶着痕が確認出来た。下面は瓦の溶着痕の間にハセ頭の窪みがある。

**ハセ（写真図版18）** 瓦積めの時、瓦と瓦の間に挟み瓦同士の溶着を防ぐ物。3～4cmの大きさに釘の形をしている。手握ね製で、フカセで素焼きしている。第7図-20・23は未使用の物、第7図-21・25は瓦の溶着痕から考えて1回使用した物である。第7図-22は数回使用されている。第7図-24は生粘土をそのまま挟んだ物である。第7図-19はオイバセと言われている。モミツチを短く切った物である。壁と瓦の間に緩衝材として使用している先端にハセ痕が確認出来た。

**火立て（第7図-18、写真図版18）** 粘土をタタラで約28×28×5cmの大きさに切り、生干しして作る。瓦の一番焚庭側の各段に使用する。瓦に直接火が当たらない様に瓦積めの時に瓦の前面に立てて使用した。また地積（一番下の段）の瓦が歪まない様に支えとして使用した。上面にモミツチ跡があるのは、火立てを積み上げていたからである。火立ては変形しない限り繰り返し使用出来る。

**鉄器（写真図版17）** 瓦外し、<sup>かすがい</sup>鏝、瓦鎌などの鉄製品が確認された。瓦外しは、窯出しの時モミツチとハセから瓦を離す道具。8房小口前作業場ではカマズヤの柱に使用したと思われる鏝が出土した。煙突付近では瓦鎌が確認された。瓦鎌は、成形した後の生瓦をキリガタに沿って切る道具である。

## その他

写真図版17-18は小口に敷かれていた用途不明品である。焼成されており厚さ20cm程で両面に格子刻みが入る。足場を固定する為に敷かれていたと思われる。写真図版17-17は房の中で確認した。球形で施釉されている。瓦の焼き具合を見る為の物と思われる。写真図版18-42は小口前作業場で確認した素焼きのカエルの置物である。写真図版18-39は近所の庭先にあったカエルの置物で来待軸が掛けられているが転用品の可能性もある。窯の職人に作ってもらったそうである。置物は火の具合を見る為に置く事もある。ピン類は房の中などで確認したので、廃業後に捨てられた物だと思われる。（写真図版18-40・41）

第4表 矢源田窯跡 出土遺物観察表

挿図 番号	写真 図版	遺物 番号	種別	器種	釉薬	出土地点	備考
6	15	1	瓦	軒棧瓦	鉄砂釉	物原	
6	15	2	瓦	軒棧瓦	来待釉	物原	
6	15	3	瓦	軒棧瓦	鉄砂釉	物原	
6	15	4	瓦	大隅瓦	鉄砂釉	物原	
6	15	5	瓦	駒型雪止瓦	来待釉	物原	
6	15	6	瓦	輪型雪止瓦	来待釉	物原	
6	16	7	瓦	棧瓦	来待釉	9房内	
6	17	8	瓦	小袖瓦	来待釉	物原	
7	16	9	瓦	割り熨斗瓦		房内	
7	15	10	瓦	大熨斗瓦	来待釉	物原	
7	15	11	瓦	雁振瓦	来待釉	物原	
7	16	12	瓦	割り熨斗瓦	来待釉	物原	
7	16	13	瓦	割り熨斗瓦	鉄砂釉	物原	
7	18	14	瓦	沓巴	来待釉	物原	
7	18	15	道具物	立浪	来待釉	物原	
7	18	16	瓦	切巴	素焼き	窯西側	
7	18	17	陶器	焙烙	素焼き	物原	
7	18	18	窯道具	火立て		通路	
7	18	19	窯道具	オイハセ		9房内	ハセ溶着痕1ヶ所
7	18	20	窯道具	ハセ		9房小口前	瓦の溶着痕2ヶ所
7	18	21	窯道具	ハセ		9房小口前	瓦の溶着痕2ヶ所
7	18	22	窯道具	ハセ		9房小口前	瓦の溶着痕4ヶ所
7	18	23	窯道具	ハセ	素焼き	フカセ内	
7	18	24	窯道具	ハセ		9房小口前	瓦の溶着痕2ヶ所
7	18	25	窯道具	ハセ	素焼き	フカセ内	
7	18	26	窯道具	モミツチ		11房内	
18	27	瓦	切巴		素焼き	窯西側	
18	28	道具物	太鼓		来待釉	物原	モミツチ痕2ヶ所
16	29	瓦	棧瓦			矢源田窯跡付近瓦溜り	
17	30	瓦	小袖瓦			矢源田窯跡付近瓦溜り	
17	31	鉄器	瓦割り			4房小口前作業場	
17	32	鉄器	鋸			6房小口前作業場	
17	33	鉄器	瓦鎌			フカセ裏	
17	34	洋瓦	洋瓦		塩焼き	白地小屋跡付近	
17	35	洋瓦	洋瓦			白地小屋跡付近	印(日)
17	36	洋瓦	洋瓦		塩焼き	白地小屋跡付近	印(物)
17	37	不明	不明			小口前作業場	火の温度を見る物?
17	38	不明	不明			小口床面	両面、切目が入る
18	39	ピン	クリームソーダ			9房内	
18	40	ピン	マミー			大口前	
18	41	細工物	大カエル		来待釉	森氏庭	
18	42	細工物	小カエル		素焼き	8房小口前作業場	

## 第4章 ま と め

### 遺構

登窯は残りが良く、甲も一部残っていたので窯の構造が明確になった。調査では登窯本体のみ精査を行い、その他の施設については聞き取り調査により、大まかな規模・構造を確認した。

登窯は周辺の環境などで特性が変わり、実際窯を焚いてみないと火の廻りなどが分からない事もある為、築窯後改良されるのが普通である。また、登窯は操業時1300℃近く温度を上げる為、粘土の質や火の廻り具合によりアゼがずれたり、崩れたりする。嶋田一族は火や粘土の特性を良く知っており、窯や房の個別の性格を観察し、適切に改修を行い新しく築く窯にも反映させている。例えば、登窯は上から下に重力が掛かる為小口が崩れる事や高熱のため房が中から外に膨張し、甲が崩れる事がある。嶋田一族は、これらの問題を解決する為に、上方からの重力を受け止めるように小口のアーチを窯の後方寄りにゆがませて築き、甲が膨張しても窯が崩れないようにアーチ部隅のアゼ同士を楔型に造り噛み合わせている。矢源田窯跡の場合は、地山のすぐ上に窯がある事によって湿気が多く火の廻りが悪かった為、煙突をつけたり、房を縮小して火の引きを強くする改修が行われた。

以上のような改修や築窯を行った結果、それぞれの房は大きさも築き方も微妙に違って

### 遺物

矢源田窯跡で出土した軒杖瓦の瓦当文様は、均整唐草紋の退化した物で、中心飾りの紐状突起から左右対称に3枚の退化した唐草が先膨らみしながら外反して伸びており、下から2枚目までは草の先端に3段の波型で葉先が表現されている。3枚目は単純化された先膨らみで、刺弁は「V」形に表現されている。この唐草のモチーフは、市内の石州瓦の古い段階や燻し瓦で見られており、様々な変遷を経た後、現在に至る。矢源田窯跡と同時期の窯跡で確認出来る瓦当紋には、同様のものが良く見られる為、当時の主流紋と考えられる。現段階では確証は持てないが、石州瓦工業組合の設立（昭和10年）と瓦当文様の一本化とは何らかの関連が有るように思う。石州瓦都野津協同組合では昭和28年の段階で、既に現在の標準的な瓦当紋を採用しているが、矢源田窯跡の物と大差は無い。又、森本幸治氏の著した「都野津町瓦工場語録」には第8図のイラストが掲載されており、昭和27年7月には、ほぼ現在主流をしめる瓦当と同様の物が瓦当の一般的な物として認識されていた事が確認出来た。

写真図版16-7・29と写真図版17-8・30で矢源田窯跡の瓦（7・8）と明治頃の作と思われる瓦（29・30）を比較して見た。棧瓦で比べて見ると釉葉の掛け方は29の裏では丁寧に3方向から構掛けされているが、7の裏では、釉葉が尻側へやや廻り込む程度である。釘穴の大きさは29では、大きめの穴が丁寧に裏まで穿孔されているが、7では、小さい穴が裏まで貫通し切っていない。これは、古い瓦は木釘を想定して開けられるのに対し、新

しい瓦は細い釘や銅線を想定し仕事が簡略化する傾向にある為と思われる。袖瓦の袖板の大きさは、30では大振りに作られ細工も細かいが、8では小振りに作られ細工も簡略化されている。これらの違いで瓦の大まかな時期が分かるのではないかと考えている。これらの特徴は、職人の個人差による所もあるが総体的に見ても作業の退化傾向を示しており、石州瓦の時期を判断する際の1つの目安になると思われる。

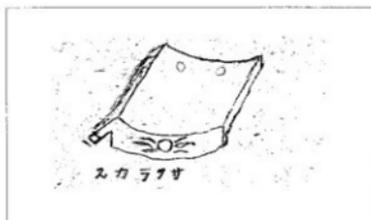
写真図版14の上は矢源田窯跡の近くにある益野家の瓦である。上の屋根に葺かれている瓦が矢源田窯跡で焼かれた瓦である。

今回、矢源田窯跡周辺で採取した遺物と郷土資料館に保管している軒瓦類の瓦当を拓本で掲載した(第10図)。瓦当は全部で29種類確認できた。1以外は施釉瓦である。唐草の形態には様々な変化がみられ、中心飾りに窯元の商標を入れた物などもある(5, 8, 11, 12, 20, 24, 25, 26)。これは石州瓦最盛期(明治~大正)頃の特徴で、経営者の増加が原因と思われる。また、社寺等の注文によって瓦当に家紋を入れる事により中心飾りの種類が増えた事も関連している。

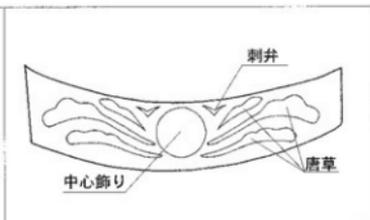
1は波積町、嘉戸氏の蔵で使用されていた燻し瓦である。特注瓦であると言われている。2は波積町にある福城寺の長門に葺かれていた瓦で、文化年間(1804~1817年)の赤瓦である。

14は立浪をモチーフとした瓦当である。

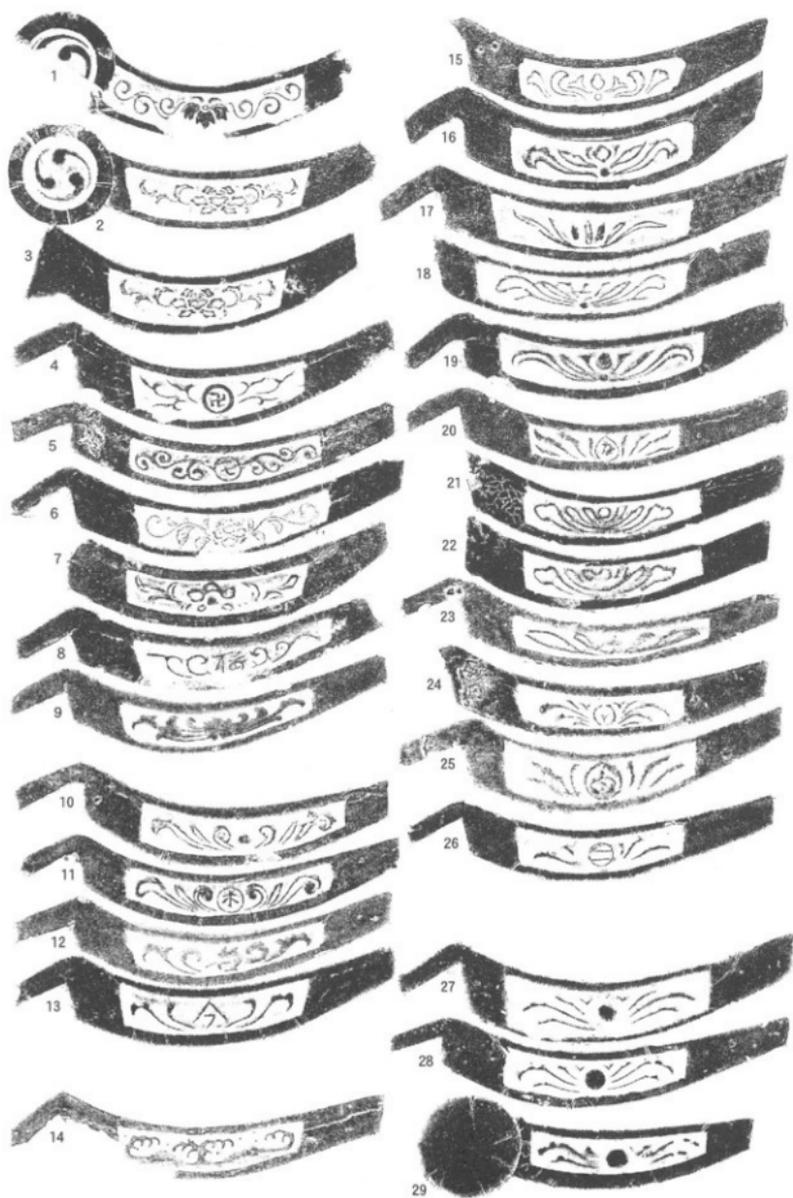
今回掲載した資料は、今まで生産された石州瓦のごく一部で、市内にはまだ多くの瓦当の種類があると思われる。石州瓦を含めた石見焼は、地場産業として大きく発展した。しかし、それと引き換えに古い窯跡はどんどん取り壊されていった。現在残る窯跡は少なく、民家に葺かれている古い瓦も年々その数を減少させている。石州瓦の一大生産地として、何をどう残していくのかがこれからの江津市が取り組むべき課題である。



第8図 「都野津町瓦工場語録」掲載イラスト

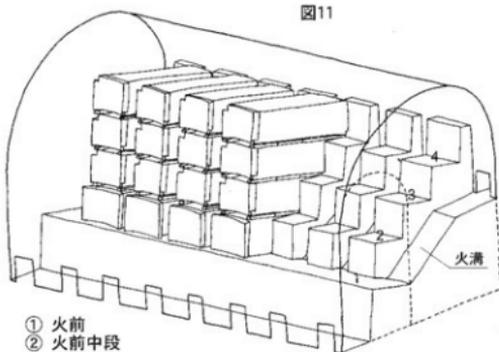
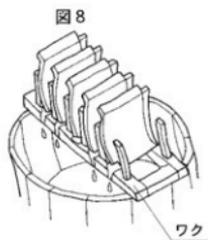
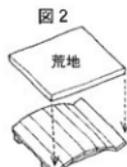
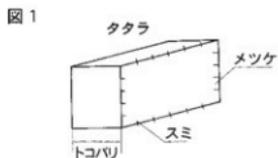
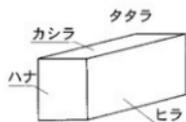


第9図 石州瓦基本構成(現代)

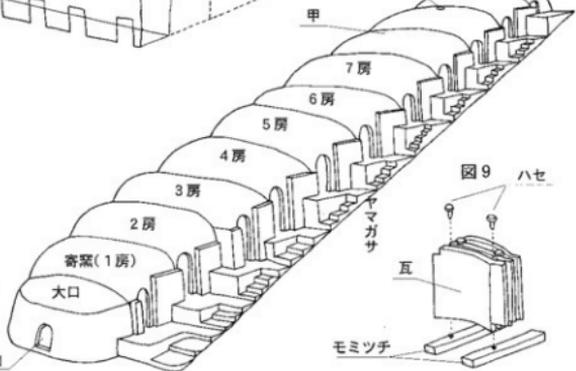
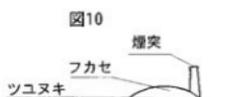


第10图 市内瓦当拓本一覽

S= 1/4



- ① 火前
- ② 火前中段
- ③ 奥中段
- ④ 奥



第一図 石州瓦図譜

(七) 経営、職工、行事

カーラヤ

瓦製造業

カンバ

瓦工場

ヤキワタシ・ヤキウケ

一枚いくらで焼いて経営者に渡す請負の一方方法

カチヨウ

工場を借りて経営する事

シラヂウケ

シラヂ一枚いくらでシラヂの製造を請負う。

オヤカタ

経営者

カンキチ

互職工見習者

ナカデマ

カンキチの上役

コヤドーシヨク

職工の最上役

トーシヨク

職工長

カマタキ

窯焚き

キリチン

一枚焼らで請負て瓦を切る人

シヨクニン

コヤドーシヨク、カマタキ、ナカデマを総称して云う

モンイタシ

紋板、須山など装飾瓦を専門に作る人

仕事初め

春になつて初の仕事日

(八) 瓦の種類

ヒラ

ノシ

太鼓(タイコ)

唐草(カラクサ)

セイガイ

切巴(キリドモエ)

ソデ(袖) 大ソデ・小ソデ

ヒモマル

クツ巴

ガンブリ

タケマル

紋板(モンイタ)

スミ

雪止

須山(スヤマ)

瓦の種類は細かに分けるとまだ多数あるが基本となる種類はこの程度である。

(補充) セツキウリ? 仲買、仲買人。

都野津で普通に行っている瓦の図譜を作製してみました。皆様方の何かのご参考になれば幸いです。

(本文を一部改編して掲載した。図面省略)

仲間入り

四月入り・小屋入り

ボンカンジョー

職工が親方を招いて酒食を共にす

セツキカンジョウ

親方が職工を招いて酒食を出す旧の四月一日ごろ。

カタメノサカズキ

盆勘定。春から盆迄の酒食の支払い

カタクオロシ

盆から歳末迄の労賃の支払

ヤマジマイ

瓦工場では職工と工場主との労働契約は三月、盆迄、盆

カマの御祭

冬迄と半年毎に行うのである。この契約が成立した場

カタクオロシ

合、工場主はカタメノサカズキと称して酒食を出す。そ

カタクオロシ

して前金をも渡すのである。前金は労働者側から全額を

カタクオロシ

申し入れる。その返済は給料から月々差引かれる。借金

カタクオロシ

の一種ではあるが利子はつかない。現在では形式的な

カタクオロシ

のとなつてきた。

カタクオロシ

セツキ前に行う。少し酒食を経営者が出す。

カタクオロシ

冬の採工終了の祝。経営者がふるまう。

カタクオロシ

カマの調子の悪い時に神宮を招いて祭をする。

カタクオロシ

ウワモノ(上物)

カタクオロシ

(タイコ、トモエ、紋板、須山

カタクオロシ

鳥休)

カタクオロシ

スミ、ヒモマル、タケマル、雪

カタクオロシ

止

昭和二十七年七月 森 本 幸 治

ツユズリ

ヒカリガクル

ナガダキ(小口の)  
カマがワク

クミキル

ハダガオクレル

ハダガサメル  
モミツケバナヲキル

クチドロヲヌル

トメ

カマナリ

ヒダテ

トガワラ

カマヒバシ

コワリ

ヤガクル

ダイソク

タキツプス

前面の瓦が倒れ落ちる事。火前の四段ごろの瓦に多い水分の多い場合にモミツチが柔らかくなって重みに耐えず瓦がずり落ちる事

下の番のカマを焚く時に上の番のカマの中の瓦が光つてくる事。

その小口を焚き出してから三〜四時間ごろ焚いているカマの中の瓦が崩れ落ちる事。一部分が強熱されすぎた場合に起こる。

下のカマの焚き具合によつて一部分が低温でカマの肌に暗色部の存する事

風が吹いて冷却される部分が暗色になる事

下番のカマを焚いている時に上のカマの火前の瓦の地積みの部と二段のモミツチとの間隔が開く事

焚き口を塞ぐ事

焚き終わったカマが冷めるためにカマの内部で音がする事。ピンピン。ドスン

瓦を厚くした様なもの。地積みの瓦のニワリを防ぐために火前の地積みの前におく。

カマの焚口に用いる素焼のフタ

トガワラを外したり上げたりまするに用いる(鉄柄)

焚木を小さく割る事

熱気が焚口より吹き出る事

大束?燃料用松材

甚だ焚きすぎた事

(六) 窯出し、選別

クチヲキル

カマハズシ

タガネ

クチヲハル

クチヨリ

カマダシ

カワラニワ

カザクイ

カマソージ

ハセヒロイ

センベツ

ニワリ

クチコゲ

一等品

二等品

三等品

四等品

等外・ヤマユキ

ヒイツキモノ

チヤンバチ

ジガアレル

ケシヨ・スミツケ

ケツソク(結束)

焚き終わつてから瓦を取り出すためにクチを開ける事

タガネによつてカマの中の瓦を離す事

鉄製品

?

クチ迄出した瓦をクチで大略選別する事

選別場への負出す事

瓦の選別場

瓦にヒビの入っている事。急冷の故にとも。土質の故にとも云う

カマソージによつて出たものの中からハセのみ拾う

瓦を何級かの段階に選り分ける

歪んだ瓦

クチがかけている事。カマ外しの時に失敗する

瓦の形真直で色良く音の良いもの

瓦の形直で色少し落ち音の良いもの

形直で色少し落ち音少し落ちたもの

形歪み色悪く音精良

クチコゲで音汚えす

瓦が互に密着して離すことのできないもの。廃品

歪みの甚しい瓦

表面の粗糲なもの。

ハセ、モミツケが外れる時にできた傷跡へ割炭(鉄砂

瓦へ)ペンガラ(赤瓦へ)をつけて見よくする

平瓦五枚一組としてワラ縄で結ぶ事(補充地積み

平瓦五枚一組としてワラ縄で結ぶ事(補充地積み

ツミドリ

ホシ

ウロコ

(四) 窯

カマ

ミギガマ

ヒダリガマ

キアゲ

ダイソク

オーイレ

カマズミ

ハセ(図9)

モミツチ(図9)

窯場の図(図10)

内部略図(図11)

ドウロ ソウリ

オイバセ

モミツチズナ

クスリガケしたシラチをそのまま、積み重ねる事。場所の狭い場合にする。

アラチヤキリタテが寒さにより中の水分が凍つて表面にできた星形の水

右記の称であつてウロコ形になつたもの

窯、現在は登り窯を普通とする。

カマズミする場合に小口が右側にあるカマ

右記の反対

燃料となる松割木をカマに負い上げる

燃料となる松割木

瓦素地をカマ運び入れる事

瓦素地をカマの中に積み上げる事

瓦と瓦とが粘着しない様に間に挟ませる。一度素焼きしたものの。

瓦の下において瓦の密着を防ぐ。粘土のまま用う

ハセ・モミツチ共に瓦の粘土より砂の多い脆い粘土を用いて作り、一瓦が焼けてから瓦と離れ易くする

モーロ ドーロはモミツチが焼けて廃品となつたものを云う。

カワラを積む時に用いる粘土。モミツチより柔い土を用いる

モミツチにつける砂で細粒の砂を用いる。アゼ、瓦などとの粘着を少なくする

メズナ

ツバミバセ

ウワダン

ノヘナ

キユーナ

ゲタをハカセル

クチヲカケル

ワタン・ホーダツ・ダイアゼ

ツユダキ

(五) 窯焼き

ヌクメ

ホンダキ

ナカダキ

コクベ

オークベ

アク

コグチヲタク

ハシレル

サエル

アガル

ハナトビ

モミツチ砂として用いる。極細粒砂。有福村産。最前面に積んだ瓦が前に倒れるのを防ぐために柔い土を挟む。その土

四段目五段目を云い道具物(カラクサ、トモエ、オ二瓦など)をつむ。

積んだ瓦が奥へ傾いている場合

つんだ瓦が垂直な場合

道具物を積む時、高さを他の瓦との粘着を防ぐ様に少し

高くするために道具物の下にモミツチをしいて高くする

クチを焚く穴を残してアゼで大体ふさぐ

ワタン・ホーダツ・ダイアゼ

クチアゼ(図12)

カマの五番ごろから末迄各小口毎に火を焚いて水分をぬ

かす

大口で徐々に火を焚く事。四、五時間×十時間

大口を強く焚く事。十六時間×廿十時間

ホンダキにかかつてから四、五時間程度のところ

少しづつ焚く事

ホンダキの終わりごろ殊に強く焚く事

オキ(燵)の事

大口が焚き終つてから各窯の小口を下段より順次に焚く

事

温度急上昇の場合瓦が破損する事

温度上昇してカマの中が黄白色になる事

焚きが終わる事

焚くのが強すぎた場合とか積み方が垂直にすぎると

キリタテ

キリタテ・キリ場

ウチギリ

ソトギリ

アナアケ

瓦部分名称

マキオロシ

リヨウナデ?

カタナデ?

ナデヲカウ

ユビナデ

(三)乾燥・釉薬ガケ

スクマセル

ホシニワ

ウラソクロイ

ステガイヌル

カヤス(モトス)

ハンシラチ

タナガケ

ダキアワセ(図5)

ミヨウハチ(図6)

ウスガケ(図7)

アツガケ

切り終わったもの

切る場所

型より内側に傾いて切る事

カワラガマの柄の先端につける瓦の穴あけ道具

ステ・サン・クチ・サンノアタマ・サンカギ(シキカギ)・

アナ・クチカギ(図4)

カマに水をつけて切った跡をなでて切り跡の小穴をつぶす事。(クチの場合)

切ったアラチをカマでなでる事。肌目が細くなつて外観

がよくなり、釉薬がのり易くなる。

角を指でなでて滑らかにする。

切った瓦を一日位置く事

干し場

乾燥より生じた裏の亀裂を粘土でふさぐ事

ステを歪む事

干し瓦をひっくり返す事

キリタテが半乾きのもの

日干したものを乾燥棚にかける事

以上のダキアワセ・ミヨウハチ・アツガケ・ウスガケは干す瓦の乾燥棚への

並べ方

乾燥中のシラチの深部が未乾で湿った色をしている事

シブがウク

亀裂

ワラ製品でコモに似ている。棚の外側に張つて強風や雨

のしぶきを防ぐ

シラチをシラチ小屋に積むために下ろす事

シラチを積むための敷物、ワラ屑

乾燥した瓦素地

積んだ圧力でシラチのこわれる事

釉薬

釉薬をシラチにかける事

クスリガケを終わつたものを置いて釉薬を小時滴らす道具

クスリジヤク

ハンギリ

ブンジ

クスリガキズム

トビガトブ

フリドリ

ムコウドリ

チバシリ

チヲキル

事

ワクにあるクスリガケしたシラチを取る事

リレー式にものを運ぶ時最初の物をとりあげる人

?

イレフネ

土を槽に入れる事。

ジョレン

土をフネに入れてそれを山鍬で小さく削り混ぜる事。現今、都野津では土練機を用いるから廃れた。

ボーズ

坊主。ジョレンした土を坊主形にして、フネより取り出す。その坊主形の土

ボーズをカヤス

ボーズを針金で三分位の厚さに切つて他へ移し、ふみつけて練る

タタラ

ボーズを針金で切つて巾尺二寸、高さ三尺位、長さ十二尺位の粘土の垣の如きものに築く。この土塀の如きものをタタラと云う。これを適当に切つてアラチにとるのであるが現在都野津に於てはアラチ機を用うるので、これを作るのはアゼを作る時だけである。(図1)

タタラが槽の方へ傾いている。

オカノ方へ傾イテイル。前記の反対側に傾いている場合を云う。

メツケ

タタラの高さを区切る印(図1)

トコバリ

タタラの中(図1)

スミ

タタラの長さを区切る印(図1)

ヒラ

タタラを一定の寸法にしてその寸法より余つた土で、両横の部分。(図1)

サゲブリ

タタラの垂直を見る器

セギ

タタラの定規を止める竹製品

デヨウキタテデヨウキ

タタラに用う。

テナウ

土を切る針金

ス

タタラの土の隙間

ジョレン以下ここ迄は、現在都野津に於ては、特殊の場合以外行はれない。

フネ 土を土練するために入れておく槽。地面を尺五寸位の深

さに掘つた四角なもの。底や囲いに板が張つてある。こ

の中に土を入れ適当に加水して使用に良い柔さにする。

土練機。土を練る機械

第一回目の土練

第二回目の土練

アラチ機。アラチ大略瓦形となつた粘土

アラチを作り

アラチの破片を粉にしてフルイでふるつたもの。アラチ

相互の粘着を防ぐためにアラチの間に入る。

土を切る針金

昔はこのものでアラチにしていたが、現在はアラチ機か

ら連続して出てくるアラチを受けるものとなつた。

アラチ機よりアラチが二枚づつ出る。その一緒になつて

いるのを離す事。

アラチをひっくり返す事

一まとめにする事

瓦製造場(カマ場を除く)

シヨリバの窓。上・下

ヒトミを扱う板

アラチがよせてあるものの廻りをまくもの。ワラ製品

アラチを叩く木製品。板の木が良い。これで叩いて土を

固める。

アラチを瓦型に切つて全て瓦の型にする道具

キリ落した粘土

アラチがキリガタに不足する場合を云う

ドレンキ

アラネリ

シアゲ・二番練り

アラチキ

アラチトリ

フリコ

テナウ

アラチ型(図2)

アラチヨワル

アラチをカヤ(エ)ス

アラチをヨセル

シヨリバ

ヒトミ

ヒトミイタ

マクリ

タタキ

カワラガマ(カマ)

キリガタ(図3)

キリクス

キリシロガナイ

# 都野津町瓦工場語録

初めに

都野津の瓦工場で用いている言葉を集めてみました。これによつて學者に調べて頂くと都野津或いは石見の製瓦技術が日本のどの辺の系統であるか解かるかも知れません。

或いは不明に終わつて骨折り損になるかも知れませんが、都野津瓦の歴史を調べるためにはあらゆる術をつくしてみなければなりません。この意味で皆様方の御協力を御願ひ致します。

この冊子の中に誤りやぬけていることがあります。ぜひとも御教へ下さい。

## (一) 採土、運搬

昭和27年7月 森本 幸治

ツチャマ

土山。瓦用粘土を採掘する場所。転じて採土の意にも用う。

ドロヤマ

泥山。右に同じ。

ウワヤマ

上山。瓦用粘土層の不用な砂土。

マサ (マサツチ)

粘度小でボツリボツリした土

マサズナ

マサ砂。マサ土の砂が、かつたもの。

ヒメマサ

姫マサ。マサ砂で砂粒小なるもの。

アラマサ

荒マサ。マサ砂で砂粒大なるもの。

ネバ

粘度大なる土

トラ

?

ダコ

?

ハサリ

粘土層間に狭在する不用物。砂層。褐鉄鉱層。

シキ

普通に採土され得る粘土層の最下底。不用な粘土、又は砂がでることが多い。

シヨウチ

小路? 前年採土した隣を採掘する場合には前年採土して跡を埋めた境界より、或隔りを置いて採土する。その隔りの土。大体一尺。

シニヤマ

死山。採土後六埋めた部分。転じて一度採土しておいた土全部をも云う。

イキヤマ

生山。土山の未採土の部分。

ズリ

崩れ落ちた土

ヤ

木、又は鉄の光つた棒。直径三分五分。長さ尺五寸位。これを土に打ち込み、土のハダを大にして土を崩す。

オトコシ。

オトコビヤク

男日役。右の名称は採土以外の労働にも普通に用いる。日やといである。

コマ

オイコに土を一荷(容積。チリトリ二杯。重量未乾燥の瓦(アラチ)六〜八枚分―一枚、一メー)入れて土置場へ負うて運搬しコマと称するもの(小さい厚紙に工場印を押したものを一枚貰ふ。この枚数により賃を勘定する。この方法による運搬法をコマと云っている。

ヒヤリ

日給で運ぶ人夫。運搬に限らず極めて普通に用いる。

坪ウケ

六尺立方の土を一坪として採土運搬を請負うる。

## (二) 瓦の成形

ドロガネル

採った粘土が雨露によつて碎かれ、又不用分が流されて使用に良い状態になる事



登窯全景（正面から）



波積町本郷遠景



調査前登窯（正面から）



登窯完堀



5 房目 (正面から)



登窯 (正面から)



登窯通路（大口付近から）



登窯通路（7房付近から）



窯北西側礎石（北西から）



7房小口前作業場（南から）



9房～煙突（南から）



8、9房裏側（北から）



大口正面



大口火格子穴



大口粘土検出状況



2 房縮小前



2 房縮小後



6 房焚庭奥壁



10 房小口



9 房内 (奥から)



9 房内 (小口から)



9 房内調査前 (奥から)



9 房甲端部組み方



11 房甲内側



11房露抜き穴



煙突（西から）



煙突、フカセ（南から）



煙突下、炭掻き出し穴



フカセ内部

白地小屋跡（南西から）



職人の宿舎跡（北東から）



物原壁（北東から）





大口土層



土層 2



土層 4



益野家屋根



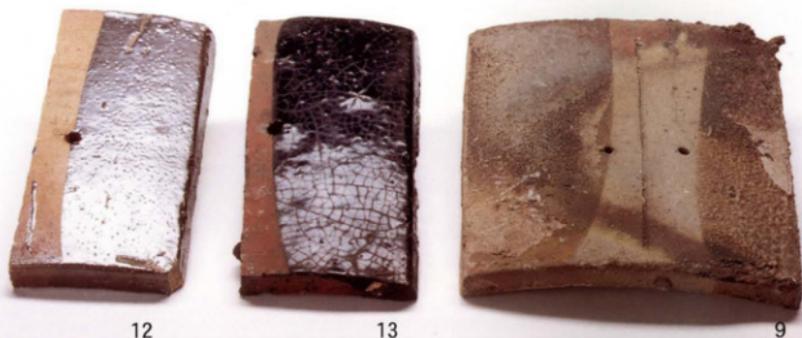
益野家瓦



作業風景



矢源田窯跡及び窯周辺出土遺物 1



12

13

9

表



7

29

裏



7

29



30



8



34



37



38



31



33



32



35



36



# 報告書妙録

ふりがな	やげんたかまあと							
書名	矢源田窯跡							
副書名	波積ダム建設に伴う集団移転地造成工事及び県道江津・井田・大田線付替え工事に伴う文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	梅木 茂雄・澤津 孝							
編集機関	江津教育委員会							
所在地	〒695-0011 島根県江津市江津町1525 TEL 0855-52-2501							
発行年月日	西暦 2003年 3月 31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m <sup>2</sup>	
矢源田遺跡	ごうつしほごみちよう 江津市波積町 ほんごう 本郷	32075	D97	35度 1分 51秒	132度 19分 43秒	20021002 ～ 20030228	249m <sup>2</sup>	集団移 転地造 成工事
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
矢源田遺跡	窯跡	近代	石州瓦窯	1	石州瓦			

## 矢源田窯跡

発行 2003年3月  
編集 江津市教育委員会  
島根県江津市江津町1525  
印刷 柏村印刷株式会社